放を求めた戦いであった。 教会という権威からの解放、フ その後は王や独裁者の権威との ランス革命は絶対王政からの解 駆け引きが人々の生活を規定し 闘いであった。古代は神の権威 た。17世紀の主権国家の成立は 、類の歴史は権威との共存と

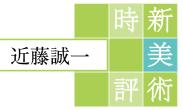
置づけられた (F・フクヤマ 『歴史の終わり』)。 の目的地に達した証であると位 冷戦の終了は、人類がこの究極 主主義という制度を確立した。 個人の自由を基盤とした近代民 こうした経緯を経て、人類は

との本質を忘れ、経済成長主義、 そして格差の拡大は、人類がこ のか。自然破壊や殺戮、分断、 しかし今の世界の混乱は何な

カネとテクノロ を示している。 されていること どの概念に翻弄 効率至上主義な

ている。 それが途上国や、ロシア、中国 ある。その奥にある近代合理主 等の新興大国の息苦しさと反発 スなどの様々な規律を課した。 ローバリズムやコンプライアン 義が近代という美名の下で、グ ジーを手に入れた超富裕層が新 に広めてきたことの負の遺産で テムを普遍的なものとして世界 たな権威として君臨している。 これは欧米が、近代文明シス 権威主義の台頭を招い

であった米国にまで及んだ。 リベラルデモクラシーの急先鋒 しかもこの流れは遂に戦後の



う独裁者を内外で生むという皮 肉な現象となっている。 になることで、それに立ち向か ず知らずのうち新たな権威社会 とへの反動なのだ。民主的な権 衆の生きづらさを生んでいるこ 理念という権威が次第に米国大 ランプ大統領の再登壇は、近代 威を否定してきた欧米が、

恕の

う、植民地主義の真っただ中で ができたのが1753年とい その象徴である。 地からの収奪品であったことは あり、その展示品の多くが植民 ジアムの草分けたる大英博物館 ミュージアムを生んだ。ミュー

ジアムだという。これまでの博 まるフォーラムとしてのミュー 知なるものに出会い、対話が始 る神殿(テンプル)としてのミ が拝みに来る、権威の象徴であ は評価が定まった「至宝」を客 物館は前者中心であったが、い は2種類の性質がある。ひとつ ュージアム。もうひとつは、未 ャメロン氏によれば、博物館に 館の館長を務めたダンカン・キ だがNYのブルックリン博物 ま世界の博物館

ォーラムとしての 大阪 ・関西万博へ

る。

性に気付いてい は、後者の重要

らの庇護の下で発展した。カネ る。 作品を展示する仕組みとしての と権力がアーティストを育て、 の覇権の象徴のためにあり、 王のため、植民地時代は宗主国 においては神のため、中世では は権威であった。芸術は、古代 間の性なのかも知れない。 を支配しようとする。これは人 の間にか次の権威となって社会 起こし、打倒したものは、 権威に息苦しさを感じて反乱を い。循環しているだけなのだ。 ここで美術に話を転じてみ 歴史は決して進歩してはいな 美術の発達を支えてきたの

ば、今年の我が国最大の博物館 ろう。それがテーマである「い そうしてこそ危険な方向に向か 拝」を押し付ける「テンプル」 合って、訪れるひとに「技術崇 先端のテクノロジーの粋を競い といえる大阪・関西万博も、 するということなのではない のち輝く未来社会」をデザイン 投じる、歴史的万博となるであ いつつある文明の流れに一石を の自由な対話を呼び起こすフォ であるだけでなく、人間とは何 ーラムとなるべきではないか。 か、どう生きるべきかについて (近藤文化・外交研究所代表) そうであれ